郡山市立小原田中学校
学校だより
No.26

手をたずさえて

“小原田PRIDE”～自信と誇り

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒

令和３年９月１６日（木）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長　熊 坂　　洋

「いのちを見つめる日」の感想の続きです

途中、音声や画像が途切れるなど視聴しずらい時間もありましたが、講話の内容をよくとらえ、感想をしっかり書いてくれた生徒が多かったです。感想を読むと、「なるほど！」と感心させられたり、新たな気付きに繋がったりするものがたくさんありました。

自然災害は、私たちの普段の生活を、いつ、どこで奪っていくのかが分からないところが怖いと思いました。私は、コロナウイルスの影響で遊びに行けなくなったり、暑い日でもマスクを付けないといけなかったりして、「昔は良かったなぁ」と思う時がありました。でも、昔は昔で放射能があって、今と同じくマスク着用だったり、外での活動が制限されたりしていたことを知り、少し嬉しく感じました。なぜなら、人々はそれらを乗り越えてきていると分かったからです。今はマスク着用やがまんが必要だけど、１０年半前と同じように、みんなで乗り越えていきたいと思いました。今、コロナがあるのと同じように、災害がいつ、どこで、どうのように起きるのか分かりません。でも、災害が起きたとしても、冷静な行動がとれるよう、防災バックや避難所の確認など、今できることをやっていきたいと思いました。（1年　工藤楓奈）

当たり前の日常が当たり前に来ることがとてもすばらしいと改めて感じました。今はコロナで大変な日々を過ごしていますが、協力し合いながら一つずつ問題を克服してきたいと思います。学校に行けるこの日々を大切に過ごしていきたいです。（2年　吉田里桜）

私は今日の防災講話を聞いて、今、コロナでマスク生活が続いて辛いなと思っていたけれど、「外出はダメ、土は触ってはダメ、マスクをしなさい、カッパのようなもので大気から身を守りなさい」という文を見たとき、私は今の生活と似たようなものを感じました。でも、震災直後は今よりももっと苦しくて自由がなかったんだろうなと思いました。目に見えないコロナと放射能、同じようだけど生活のしかたは全然違くて驚きました。震災の時のことは全くおぼえていないけれど、その時の支え合っている人の話や写真を見て、もっとコロナ対策をがんばろうと思いました。（2年　吉田明愛）

今日の防災講話を聞き、約１０年前に起きた東日本大震災の被害の大きさを改めて知ることができました。当時の私は、久しぶりに宮城県の石巻から郡山に帰って来ていて、遊んでいる時に東日本大震災にあったという形でした。その後すぐにイオンタウンのそばにある祖父の家に行き、石巻へ電話しました。私の親せきは全員無事でした。その後に、石巻の親せきの家の近くにあった高速道路のところまで津波が来て、そこで止まったことや、親せきの友達が津波で亡くなったことなど、いろいろな話を聞きました。私はこの震災のような悲劇はもう二度と経験したくないと思いました。そのためには、今、生きている一人一人がこの震災を忘れないこと、そして、この震災を知らない子どもたちに、この話を伝えていくことが大事だと思いました。（2年　鈴木彩瑛）

私は今日の防災講話から、もう一度命について見つめなおしたいと思いました。一日一日を大切に、いざという時は、仲間と助け合って命を大切にしたいと考えました。災害はいつも他人事ではなく自分事に感じるようにすること、そして、私達は誰かに「支えられている」「生かされている」ことを日々忘れずに、自分の命を大切にしながら生きていきたいと思いました。（3年　鈴木海詩）

僕はこの話を聞く前まで、東日本大震災について、太平洋側は被害が大きく、内陸部は被害が少ないと思っていました。しかし、今日の話を聞いて、この考えはガラッと変わりました。内陸部の本宮市であんなにも被害を受けており、公民館やプレハブの仮設校舎で授業をしていたなんて、この話を聞く前までは想像もできませんでした。『郡山は海から遠いから、地震の被害はそこまでは大きくないだろう』と前まで思っていたけれど、やはり地震を含めた災害への備えは大切だと思いました。そして、東日本大震災は風化させてはいけないことで、被災体験を後世に語り継いでいくことも大切だと思いました。(2年 佐藤善生)

たった１回の地震で、ここまでの被害が出ている学校を初めて見た。自分は水道が出なくなったくらいで、家が壊れたりはしなかった。たったた１回の地震で、今までの生活が一瞬にして壊れてしまうという事実を知り、驚いた。本宮二中の地震による被害を見て、人が校内にいたらケガを負うか、最悪死んでしまったかもしれないという危険さを知った。そして、一番強く感じたのは、避難訓練の大切さだ。いざという時に、どれだけ速くしっかり避難することで、少しでも被害を減らすことができると思った。同時に今の自分はとても恵まれた環境で育ったのだと実感できた。そして、一日一日の大切さを実感するとともに、今生かされていることにも感謝しなきゃと思った。小さい頃自分の体験した東日本大震災の危険さも忘れかけていたころに、この防災講話を聞けてよかったと思う。これからの避難訓練も決してバカにせず、真剣に取り組んでいきたい。(3年 鈴木日向)

「くじけないで」とたくさんのエールをいただいたこと

くじけないで

ねぇ　不幸だなんて　溜息をつかないで
陽射しやそよ風は　えこひいきしない
夢は　平等に見られるのよ
私 辛いことが　あったけれど　生きていてよかった
あなたもくじけずに

これは、本宮二中で震災後に実施した全校道徳の授業で紹介した柴田トヨさんの詩です。震災で打ちひしがれた生徒たちの心に届け、という想いで紹介しました。

柴田トヨさんは、９０歳を過ぎてから詩を書き初め、９８歳で刊行した詩集『くじけないで』と第２詩集『百歳』がベストセラーとなりました。２０１３年１月に１０１歳で亡くなられ時には、トヨさんの優しく温かい詩を愛した多くの人が、別れを惜しみました。

《(略) もうすぐ百歳になる私／天国に行く日も／近いでしょう／その時は　陽射しとなり／そよ風になって／皆様を応援します (略)》(詩「被災者の皆様に」より)

震災時、トヨさんはこんな心情を交え被災地にエールを送りました。トヨさんの詩が家族や家を失った人々の心の支えになったといいます。トヨさんの詩からは、凛(りん)とした生き方や、やわらかな感性が心にまっすぐ届いてきます。トヨさんの詩集を「心の教科書」と呼ぶ人もいます。

本宮二中での震災体験では、「人は多くのものに支えられている」「目に見えないものがいかに尊いか」ということをしみじみと実感することができました。トヨさんの詩のように、多くの人々から「くじけないで」とたくさんのエールをいただきました。それらを心で受け止めた生徒たちの中では、くじけない心が、たくましさ、そして、強くてしなやかな心へと変化していったように見えました。

被害を受けた校舎の脇には、いつもと同じくチューリップの花が咲いていました

ICT支援員の中村さん お世話になっています！

中村さんの支援を受けての防災講話

今回のZOOMによる防災講話は６月から本校に配置されているＩＣＴ支援員の中村崇(たかし)さんの助けを借りての実現でした。中村さんは週に１、２日本校に勤務し、タブレット等のＩＣＴ環境整備や授業・校務支援にあたってくれています。授業でタブレットが快適に使えるのも中村さんの働きによるところが大きいです。今後も中村さんの力を借りながら、タブレットやZOOM機能の活用を図っていきたいと思います。ちなみに９月16日の生徒会立会演説会や24日の新人戦・合奏祭壮行会もZOOMで実施する準備を進めています。様々な場面での活用がより一層期待できます。